

# HKFA Technical Report 2018

平成 30 年度 第 97 回全国高等学校サッカー選手権大会北海道大会 決勝

## 日時

平成 30 年 10 月 13 日(土)  
～21 日(月)

## 会場

札幌厚別公園競技場

## 決勝戦

北海道大谷 室蘭高校	(1-1)	旭川実業 高校
	(0-1)	
Total 1-2		

## HKFA/TSG member

渋谷直哉 (U-12)

柴田晃宏 (U-14)

小林俊也 (一貫指導 U-16)

仲孝平 (GKP)

宮永裕教(TSG チーフ)



## 1 大会の概要

昨年と同様の決勝の組み合わせとなった。今年度の北海道プリンスを制した王者の風格のある旭川実業と、北海道プリンスでは最下位になったものの、北海道予選すべてを無失点で勝ち上がってきた堅守大谷室蘭の試合は、予想通りの接戦となった。

リーグ戦文化の醸成により、地方チームのレベル向上が、結果的にトーナメントの質の向上に繋がっていると感じています。決勝戦では、北海道の2種サッカーの集大成を見せて欲しいと思います。(2種委員長 荒忍氏)

## 2 両チームへのインタビュー (試合前)

<大谷室蘭監督 及川真行氏>

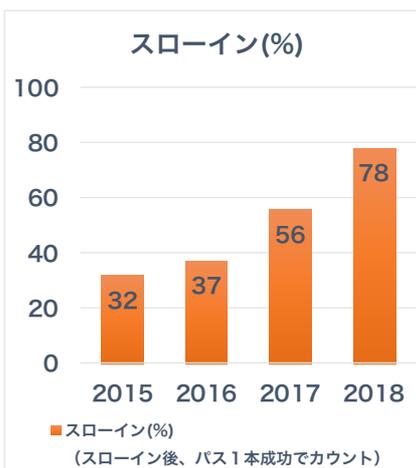
今年のチームとしては、プリンスリーグで負ける試合が続きました。ですが、その分この選手権の予選では全員のハードワークによって厳しい試合をものにして勝ち上がってきたので、その点については力をつけてきたと思っています。

決勝戦については、旭川実業の方が選手個々の力が高いので、しっかりと守備をするなかで、カウンターやセットプレーなど、相手の隙を逃さず、最後まで粘り強くたたかっていきたいと思います。

<旭川実業監督 富居徹雄氏>

準決勝まで攻守のバランスを崩さずに、安定したたたかいを展開することができてきたと思います。

一方で、得点チャンスを決めきれないことで苦しい時間帯を作ってしまったこともありました。これが今後の課題だと思います。決勝戦のポイントとしては、いかに守備の面で勝負できるかだと思っています。この一戦で勝つために今までやってきたことを出し切ったたかってくれることを全ての選手に期待しています。



#### <データ比較>

ポゼッションについては、昨年度同様の数値となっているが、スローインの成功率は増加傾向にある。この傾向は、U-12 全日本少年・U-15 クラブユース各大会の決勝戦についても同様に見られ、北海道全体におけるサッカーの質の向上につながっていると考えられる。

### 3 成果

#### 【攻撃の優先順位】

背後を狙う動き方について、両チーム共にバリエーションが見られた。単にチェックの動きを入れて相手をはがすような動きだけでなく、味方とタイミングを合わせることをはじめ、相手との駆け引き・パワーやスピードを持ってゴールを目指すようなプレーが随所に見られ、チーム戦術だけではなく、個人の判断が伴った背後への攻撃があった。

#### 【粘り強い守備】

大谷室蘭と旭川実業はたたかい方こそ違いはあるものの、両チームとも前線からの守備の構築については、チームコンセプトとして行われていた。

そのなかで、この決勝戦においては、両チームともバイタルエリアの相手チームの攻撃に対するゴール前の粘り強い守備が光っていた。『シュートを打たせない』『シュートを決めさせない』ための冷静な判断が出来る選手が多くいた。

#### 【ヘディングの競り合い】

相手に競り勝つためのヘディングに工夫が見られた。相手のジャンプのタイミングや身体を使い方に応じた競り合いができることは、全国大会で勝負をする場合の必要な個人スキルの一つである事は間違いないだろう。

### 4 課題

#### 【シュートから逆算したバイタルの攻略】

個々のフィジカルや、個人戦術だけに頼らず、チームとしていかに得点を奪うか、ということがこの年代では求められる。そのなかで、選手個々がサッカーの原理・原則を理解し、相手との駆け引きからどのようにシュートを打つのかなど、多彩なアイデアと、ゴールを生み出すための引き出しが必要であろう。

#### 【カウンター精度】

カウンター時に、守備から攻撃への切り替えの速さは見られたが、その際のパスの質やキックの精度については課題であったと感じる。また、受け手の準備不足によって、有効なカウンターが出来ない場面も多く見られた。

#### 【ミドルシュート】

この年代であれば、どのポジションの選手であっても、ミドルシュートを打つ技術とその意識が必要であろう。このことについては、今後の北海道全体の課題になるのではないかと考える。

世界基準を日常に  
日本のトップレベルを目指す北海道  
5ブロックでの一貫指導体制の構築

## 5 GKのプレー

### 守備（クロス）

クロッサーのボール保持状況に応じてゴール前の状況を観てポジショニングの修正をおこない、クロスボールに対して積極的にチャレンジしていた。一方、両チームともCKから失点しており、共通点として相手選手がGKの近くに立ち、ハイボールに出ていくコースをブロックしているシーンが観られた点が挙げられる。このような状況において、守備側として、ゴールに近い位置にクロスボールを送り込まれると、GKのキャッチやクリアが難しくなるので、ゴール前の相手選手やキッカーの状況から判断、駆け引きをしつつ、ポジションを取る必要があると感じた。

### 攻撃

ディストリビューションにおいては距離の短いパスは素早い状況判断から味方に配給され、スムーズな攻守の切り替えにつながる場面が多くみられた（13本中12本成功）。しかし、ロングパスとなるとつながる回数が大きく低下している（29本中4本）。ロングパスは、つながれば有効的に相手陣地へ侵入できる手段でもあるので、GKが状況に応じてキックの種類を意識して使い分けが必要があると感じた。

### GKのプレーまとめ

全体を通じてボール状況に応じてポジショニングをとった上で正確なキャッチングやカバーリングをみせていた。クロス場面では年々GKとしてできることが増えている（状況把握のために事前に観ること、ポジショニング修正、味方へのコーチング、クロスボールへのチャレンジ）。

今後の課題としては、タイミングがとりにくいクロスからシュートへの対応や、パンチングのテクニック、ゴールを守ることとゴール前を守ることの両立を意識したポジションをとることが挙げられる。

## 6 両チームのインタビュー試合後

### <大谷室蘭監督 及川真行氏>

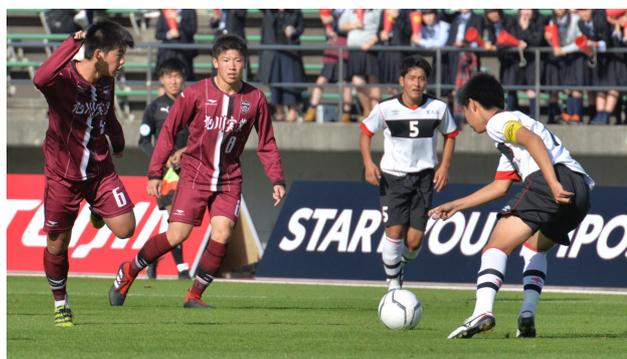
5-4-1のシステムで守備ブロックを形成しつつ、粘り強く守備をしてくれたと思います。また、守備的なたたかいのなかでもCKから得点できたことは良かったと思います。

選手は100%以上の力で本当によくたたかっていたと思います。だからこそ、攻撃にパワーを発揮できるシーンを作ることができなかった点は反省点です。この悔しさを次のチームにつなげていきたいと思います。

### <旭川実業監督 富居徹雄氏>

室蘭大谷の守備は予想通り堅く、前半はこちらの思い通りの試合運びができませんでした。そこで、裏をねらったりサイドを使ってスペースを作り出し、揺さぶりをかけて攻めるイメージを持つことをハーフタイムで確認し、後半のたたかいに繋がりました。

この全道大会で見つけた課題の一つとして、失点した後に不安定な時間帯をつくってしまったことがあったので、そこを改善し、大会に臨みたいと思っています。



## 7 まとめ

北海道大会には出場できなかったものの、実力のある地方のチームが増えていることは、トーナメントのレベルアップに繋がっており、2種全体のレベルアップにも繋がっていると考える。

最後に、2種委員会の皆様をはじめとして、HKFA/TSGの活動にご協力頂きました関係者の皆様に、深く感謝申し上げます。